

フィールドとしての豊島

— 学びの場を考える —*

藤 本 延 啓 村 山 聡

研究者が研究対象地に住んでいることは意外に少ない。共同執筆者の一人藤本は自らの研究上、参与観察を目的に豊島に住んでいる。また下記に示すように、香川大学の学生はこの数年、教育プログラムとしての「豊島プロジェクト」を発足させたため、しばしば豊島を訪問している。豊島住民とのこれらの交流体験を通して、社会科学的研究における「フィールドとは何か」ということを考えるのが本稿の課題である。

香川大学教育学部人間発達環境課程人間環境教育コースでは、2004年4月から、大量の廃棄物が不法に投棄された香川県土庄町の豊島（てしま）が抱える課題や島の魅力を多角的に研究する「豊島プロジェクト」を発足した。このプロジェクトは、3部門から成り立っている。第一は、コース2年生の前期のコンピュータ学習と後期に実施する生涯学習に関係する諸施設を訪問調査する実践研究Iとの二つの演習を組み合わせた「豊島プロジェクト教育プログラム」¹である。第二は、豊島の自然、文化、社会などを幅広くまた深く学習し、卒業研究として結実させる「豊島プロジェクト卒業研究」であり、第三に、コースに在籍する学生のほか、大学院生の参加も得ながらより高度なフィールドサイエンス（地域研究）についての演習を行う「豊島プロジェクトOS」である。OSというのはドイツ語のOberseminar（オーバーゼミナール＝上級演習）の略である。博士課程レベルの内容だが、学生も参加している。

本稿は、2004年7月5日に開催した第1回「豊島プロジェクトOS」における藤本の報告と2004年度後期に行なった学生のインタビューを素材に作成したものである。

1. 豊島事件の概要

まず「豊島事件」の概要についてまとめておこう。

事の発端は、豊島で砂の採取を行っていた業者「豊島総合観光開発株式会社」（以下、豊島観光）の実質的経営者が、1975年に有害産業廃棄物の中間処理施設の建設許可申請を香川県にしたことである。その経営者はいわば札付きの人物であり、豊島住民はすぐ処分場建設反対の行動を開始し、県庁へのデモなどを経て、処分場の建設差し止めを求める裁判を起こした。

しかし、当時の知事による発言「住民の心は灰色だ」（豊島住民が業者いじめをしているとの趣旨）に代表されるように、香川県の本件に関する調査・認識は不十分だった。許可申請の内容を「無害なものによるミミズ養殖」に変更した豊島観光に対し、裁判中にもかかわらず、香川県は処分場建設の許可を出してしまい、1978年に豊島住民は豊島観光と裁判上和解した。

しかし、まもなく許可された品目以外の廃棄物が持ち込まれるようになった。1983年から産業廃棄物を運ぶ専用船を使うようになったことから、廃棄物の持ち込みは活発になり、野焼きをするようになった。豊島に持ち込まれた産業廃棄物の多くは「シュレッダーダスト」と呼ばれる自動車

豊島事件年表

豊島事件は大まかに分けると3つの時期に区分できる。

I. 1975—1978 和解まで

- 1975年12月18日 豊島観光が香川県知事に有害廃棄物処理場建設の許可申請
- 1976年2月23日 豊島住民1425名の反対署名
- 1977年2月15日 前川知事が「住民の心は灰色」と発言
- 1977年2月27日 「廃棄物持ち込み絶対反対豊島住民会議」結成
- 1977年3月4日 豊島住民515名が県庁へデモ
- 1977年6月28日 豊島住民が高松地裁に処分場建設差し止め裁判申し立て
- 1977年6月28日 豊島住民259名が廃棄物持ち込み阻止目的で道路に杭を打つ
- 1977年9月16日 豊島観光が無害物によるミミズ養殖に申請変更
- 1978年2月1日 ミミズ養殖による土壌改良剤化処分業のための汚泥処理に限定して、知事が処分場建設を許可
- 1978年10月19日 豊島住民と豊島観光が高松地裁で和解成立。県が豊島住民に監視を約束。

II. 1978—1993 公害調停申し立てまで

- 1983年ころ 大量の不法投棄はじまる
- 1987年ころ ぜんそく患者多発
- 1988年4月2日 元家浦自治会副会長がぜんそくで死去
- 1990年11月16日 兵庫県警が豊島観光を強制捜査
- 1990年11月28日 豊島住民が「廃棄物対策豊島住民会議」結成
- 1991年1月23日 豊島観光の経営者が兵庫県警に逮捕される
- 1993年11月11日 公害調停申し立て 中坊弁護士が弁護団長に就任

III. 1993—2000 調停成立まで

- 1993年12月20日～1994年5月31日 県庁前で「立ちっぱなし」抗議行動
- 1993年12月 県が環境白書で「安全宣言」
- 1994年3月23日 第1回公害調停
- 1994年5月2日 メッセージ・ウォーク出発
- 1994年12月13日 2億3600万円の「実態調査」を閣議決定
- 1996年9月20日 豊島住民が銀座でデモ
- 1997年6月26日 土庄町出身県議が「豊島住民の運動は根無し草の運動」との発言
- 1997年7月14日 住民会議に女性委員会を設置
- 1997年7月14日 住民会議が小豆島に本部を設置して「ローラー作戦」開始
- 1997年7月18日 中間合意
- 1998年2月6日 30万人署名を県に提出
- 1998年7月15日 100カ所座談会の第1回開催
- 1999年4月11日 豊島住民の石井亨が県議選で当選
- 2000年6月6日 調停成立

の破碎くずであり、プラスチック類が主であるため焼却すれば黒煙をあげる。この時期、豊島ではぜん息患者が多発していた。

豊島観光がこのような事業を実施している間、香川県は118回の立ち入り検査を実施したが、香川県は廃棄物処理ではなく金属回収事業との見解を示していた。

1990年、兵庫県警が豊島観光を強制捜査し、翌年には事業者が逮捕されたことによって、豊島事件は大きな転換期を迎えた。豊島住民は香川県がなんらかの対策をとってくれるものと期待したが、香川県はなんら実効性のある対策をとらず、「処分地に危険な物質はない」との「安全宣言」まで発表した。その一方では、マスコミを通じて「ごみの島」という印象が日本中に伝わり、豊島産のみかんや魚がうれなくなるなど、風評被害が発生し始めていた。

事ここに至り、中坊公平氏をはじめとする弁護団の協力を得て、豊島住民は公害等調整委員会（公調委）への調停申請に踏み切った。公害調停という行政手続きによる解決手段を選択したのは、豊島住民には裁判で争うための力もお金も時間もなかったからである。例えば、公調委では豊島の不法投棄現場の実態調査を1994年から95年にかけて行ったが、この調査にかかった費用は2億3600万円であり、とても住民が負担できる金額ではなかったが、もし裁判を選択するならば、このような費用は住民が負担することになるのだ。

住民は公調委での手続きや協議を進める一方、豊島の現状を知らせていく活動を地道に続けた。県庁前で無言の抗議を続けた「立ちんぼ」、島の若者9人が香川県下の全市町を歩いて訪れた「メッセージウォーク」、夜行の貸切バスで往復し、東京の銀座に豊島のごみを持ち込んでデモをした「東京キャラバン」、土庄町6000戸全戸を訪問した「ローラー作戦」、香川県内百数十ヶ所で座談会を開いた「『豊島の心を100万県民に！』キャンペーン」など、普通の生活者であった豊島住民には過度の負担となるものだったが、住民たちはこれらの活動をやり遂げていった。県議会選挙において1000票程度しか持たない豊島から、豊島住民の石井亨を県議会選に出し、1999年に7340票を得て当選させたのは、これらの活動が効果を上げつつあることを示したと言えるだろう。

そして2000年6月6日、真鍋県知事が豊島を訪れ、住民に対して謝罪をし、公害調停が成立した。しかし、ごみを撤去し、無害化する作業には今後10年の時間と500億円の費用がかかると試算されている。また、処理のための溶融炉が爆発事故を起こしたり、基準値を超えるダイオキシンを含んだ水が誤って放流されたりといった問題が次々と発生しているのが現状である。

2. インタビューが明らかにする豊島

この豊島の住民における豊島事件に関わる思いを、まずいくつかの発話からひろってみよう。

「悪いやつが産廃の事業をやったらほんとにひどいことになるんじゃないか。」住民A

「あれはあれで止めないとなんぼでも広がっていく。」住民B

「風向きによっては真っ黒い煙が流れてきた。ガラスのさんに煤がたまっていた。最初の裁判の頃のことはよくわからない。」住民C

「ミミズの養殖の頃からおかしいと思いだした。煙が出始めてから、これじゃいかんと思った。」住民D

「死んでもいいからしたい、と思った。だからやった。」住民B

「当時の豊島の中の感じは、県に立ち向かっていってもこれだけの産廃がのくわけがないという考えを持つとる人が多かった。産廃がのくわけがないとほとんど100%の人が思っていた。県にたてついても仕方がないとは3割くらいの人が思っていたんじゃないか。」住民A

「島の結束は強くなった。しかし、みんな年をとった。」住民E

「ちいさいころからごみが運ばれてるのが日常だった。ビデオで見ると、なつかしいくらい。僕

らの年代は関心がない。」住民F

「産廃のことを一生懸命しよるときはみんな出てきたやん。その精神を忘れんように。」住民G

「産廃はもうええわいな。これなんぼ力注いでも、再生につながらなかつたらなんにもならん。

県とか町になんとかしてくれと(頼むべき)。産廃、産廃って、いつまで言いよるんや。住民は離れてしまうで。」住民H

このような住民の言葉からは、激しい闘争を経て勝利をつかんだ「偉大な島」というより、むしろ「普通の島」としての姿が浮かんでくる。

豊島の戦いは、「いかに自分たちの思い(正しさ)を認めてもらえるか」に集約される。しかしその「正しさ」は、「地域エゴ」とも見なされうる「大きな流れに明らかに反すること」だった²。そのような島を動かしていたのは、理屈や観念ではなく住民たちの「思い」だったのだ。しかし、30年に渡る戦いは住民を疲弊させた。活動の中心にいた住民たちは年をとった。一方で、若い世代にとって、豊島にごみがあることは「日常」であって、客観的に問題化できるものではなかった。島民の中に世代間でギャップが存在している。

また、公害調停の成立を経て、住民たちの思いも変化し始めている。「普通の」田舎・離島としての問題である過疎や高齢化、現金収入の問題が「産廃」を相対的に超える問題として頭をもたげはじめている。

豊島の活動は、住民が行政に“勝利”を収めた希少な事例として、またそれを成し遂げた“特別な”“凄い”住民として評価されることが多いように思われる。しかし、もともと豊島は瀬戸内のあたりまえな島の1つであったし、必ずしも島の中は一丸とは言えない状況にあることは明らかである。

オーラルヒストリーについて語った家族史研究の中心的研究者であったタマラ・ハレヴンが村山に語ったことは、インタビューで最も大切な事は信頼を得ることだということであった。人から何かを聞き出すということよりも、聞き手と話し手の対話が新たな事実の発見を導き出す。歴史研究全般についても言えることであるが、純粹に客観的事実というのは存在しない。確かに事件は存在している。阪神淡路大震災や第二次世界大戦は客観的事実であると疑う人はいない。しかし、たとえば、「宗教改革」のように後世の研究者がある一定の時代のある一定の場所での出来事の総体を「宗教改革」と名付け、定義付けを行ない、またその歴史的事実を叙述することによって、「宗教改革」は実体を獲得する。そして、研究者の論争において、その「宗教改革」は常に書き換えられる。つまり、落合が述べるように、「エスノメソドロジーと構築主義の洗礼を受けた後のインタビュー方法論」では、「インタビューは客観的事実を聞くのではない、話し手と聞き手の相互作用の中で共同でリアリティを紡ぎ出すこと」である³。

以下で記すことは、複数の学生による住民I氏との対話の記録である。本稿においてこの学生の記録は非常に重要な部分である。インタビューを真摯に行ない、また、そのインタビューを文字化した彼らの努力にはいくら感謝してもしきれない。本来氏名を挙げて感謝の意を述べるべきであるが、プライバシーの関係もあるので、発話者に登場順にアルファベットを付している。また、住民の場合もこれまで登場した住民の発話の順番でアルファベットを振っている。

2-1. 島の学校

学生A：今、小中学生があんまりいないと聞いたんですけれども、で、やっぱり高校も外に出ないといけなくて、親としても子どもには広い世界を見て欲しいって言うのがあるんですけど、島の活性化を考えたときに、後継者の育成って大事なことだと思うんですよ。外に出て欲しいっ

て言うのと島の活性化って相反するものだと思うんです。どう思われますか？なんか、うまく質問になっていない気がするんですけど・・・

住民I：いや、よく聞かれそうな話やなあと思って。んー、水俣なんかはどうなんかな？どこも同じような状態なんじゃない？島に限らずだけでも、ねえ、っていうのは若い人で残る人って滅多にいないんだよね。で、逆にそこに住み着く若い人って案外よそ者だったりするんだよね。そこにも住み着いているのが一人（笑）これからもそういうことがよく起こるって気がする。んで、「外の広い世界」って言う言い方をするのはどうかな？わりと、若いお父さんやお母さんには大勢の中でもまれて競争力をつけるって思ってる人が多いね。で、学校の統廃合なんかは親のそういう考えで、親主導でやることが多い。今の豊島の親たちがどう考えるのかはわからんけど、豊島は今（小学生が）34人でしょ？35だけ？？中学生が16人。ま、どっちにしても豊島で一学年が2クラスなんてことはありえないだろうけど、そうすると逆に子どもらばかりでもまれるんじゃなくて、じっちゃんから本当に小さい子どもらの中で、縦の繋がり、地域全体で子どもたちを育てられる。育てられたらいいなあってのはある。こういうのはでっかい学校じゃできないことだから。都会ではできないことだし。豊島でできる、豊島の特性としていい所ってどういうところなのか？都会と同じ尺度で競争したってしょうがない。そうしたからって残るかって言うとそういうわけじゃないだろう。いったん島を出て、いろんなところを見て、ま、住んで、実際にそこに住んでみて、やっぱり豊島が良いって思っただけで帰ってくるならそれが一番良いと思う。（中略）寧ろこうやりたいことっていったら、ホントにね、丸ごと学校を開いてしまえたらいいなって、今は学校って言うところはすごく閉鎖的なところで、自分の子どもが学校に行ったら別だけど、行ってなかったら本当に関ることってないもんね。で、何が昔と変わってきたかっていうと、昔は大家族でもあったし、子どもたくさんいたでしょ。子どものいない家庭のほうがほとんどないくらいでね。学校で物を決めるってことは地域社会で物を決めるってことですよ。子どもが家に帰ってね、「今度学校でこんなことするよ」って言えばそれは地域で決めることになる。（中略）それを取り戻せたらなあ。企業で研究者として、または専門家として生きるんだって別かもしれないけど、そうじゃないんだってどこへいったって仕事上であれ生活上であれ問題に行き当たったらどこに問題があるのかってゆうのを探り当てて、それを自分で解決していけるような、そういう力を企業も地域社会も一緒になって。そういう意味では豊島って言うところはすごく面白い環境を持ってるんじゃないかなって言う風に思うのね。それと、最近よく言われるのは“スキル”ってことをよく言われるよね。そのスキルって言うのはどれくらいの世代のときにできるのかなって思うと、ぼくはもう中学生くらいで基本的なところは固まっちゃうんじゃないかなって思う。で、あと高校大学で何やってるかって言うと、自分が物事に行き当たってそれに対応していくパターンをより実践的にしたりとか社会的にきちんと認知されるような技術で評価したり分析したり。そういうものは大学とかで身につけるだろうけれども、人間としてどういう行動パターンを起こすかっていうのは、置かれている状況を把握して何から取り掛かっていくかっていうそういう部分って言うのはもっともっと若いって言うか、子どものときにできちゃうんじゃないかっていう。最近ね、総合学習って言うのを見に行くとそんな気がする。だから、小中学校しか豊島にはないけれども、それと地域をうまく連携すれば、すごく面白いところになるなあっていうのはあるよ。ていうのはね、もうちょっと具体的に言うと、PTAにはかなり危機感があって、それは何かというと、複式になるんじゃないかっていう、そういうことに対する危機感のね。クラスによったら、2人で一学年って言うクラスもあるわけで。今のところ町のほうが複式を避けてるんだけれども、複式がいけないって言うわけじゃないんだけれども、なんとなく

複式学級って言うとなおさら基礎学力って言うのが落ちていくんじゃないかって言う漠然とした危機感を持って、そういう中で、離島留学っていう、一年間島にあなたの子供を預けてみませんかっていうのを言う人もいるの。で、そうするとね親が例えば、高松市内の小学校に子どもをやってるとして、子どもを島に一年預けてみようかって言うのは、親がそれくらいの子どもを自分の元から離すって言うのはすごく勇気がいるし、お金もかかるし、それでもやろうというような、魅力がない限り離島留学って言うのはありえないだろうなっていうのはある。そうすると島でできることは何か、島だからできることは何か？っていうのを考えて、街じゃこんな教育できないでしょって言う環境を作らない限り、そういうものって生まれてこないんじゃないかな？たぶんね、子どもをどう育てるかって言うのを、子どもに限らないけれども、大人になってからもそうかもしれんけれども、どうやって主体的な人間にしていくのかって言うことって言うのは、田舎ばっかりの問題じゃないけどね、すごい大きな課題だと思うし、かえって面白いんじゃないかな。はい、こんなんでもいいの？

2-2. 廃棄物処理

学生B：それじゃ、僕からいいですか？えっと、産廃がなくなったとして何かをするって予定は決まってるって言うか、合意の上ではあの産廃後をどうするかって言うのはまだ決まってる、元の状態まで戻すってことしか決まってると思うんですよ。後についてはいろんな案が・・・全くないんですか？

住民I：そこんところははっきりしてないね、今んところ。廃棄物が持ち込まれる前の状態に戻すってことは、どういうことを意味するのか、全く自然の荒らされていない状態にかえすことなのか、それから、ごみを入れる前には砂を取る事業をやったのね。その程度の状態に戻すのか、その辺はあまり整理されてない。ただ、廃棄物が本当に処理しきれんかどうかも今の段階ではわからないのが1つと、できたとして、無害化が出来たとして、どこまで汚染土壌を掘り下げる必要があるのかということもはっきりわからない。じゃあ、“元”っていうのはこういう形を言うんですよって言うのが決まったとしても、そこ廃棄物が終わった状態とどれくらいギャップがあるのかって言うのが今の段階では全くわからない。で、それを誰がやるのか。それと、もう一つは仮にもものすごく掘り下げちゃったとしておっきな穴が開く。これをあそこにあるような花崗土で埋め戻して、元のような地形に戻すんだとしたら、まず、費用的に莫大な費用がかかる。その部分を本当に税金でやっいいのか、こういう問題。もう一つはないんだから、土が、そうすると、ここを元に戻すためにどっかの山を削るのかって言う話。そういうことを含めて課題が非常に多いと。だから、理想とか夢って言うよりも、その考え方のところに明確な哲学がないといけないし、これに一本筋さえ通せば結果としての物理的かたちは何でもいいのかもしれないと。でも、それがなんなのかっていうことは我々にはまだわからない。十分な議論も始まっていないし。

学生B：とりあえず、産廃をのけるってことで固まってしまってるっていうか・・・

住民I：今はね、ダイオキシンの流出問題でいろいろゴタゴタしてるけど、水の収支取り扱いの問題と、溶融がある程度安定してきたら本格的にその問題に入る時期が来るということ。現場の処理や管理がうまくいかないのに、それは置いて先の話しをしようってわけには行かないから。

学生C：産廃処理施設を直島に作ったって言うのは？豊島の人でも、豊島に作ってそこで働く人たちも出来て、みたいな感じで話してた人も何人かいらして。その件については？

住民I：う～ん。どこも受け入れてはくれないだろうという主旨で、豊島に溶融炉を建設するとい

うのを認めた。で、島全体では議論をあんまりしてないんだけど、でも、調停に当たってる当事者たち弁護士ら含めて、15人20人くらいの間では相当な議論を繰り返した。それはね、この事業であろうとも島の経済構成の中に利用するべきではないのか、そういうのがあった。で、乱暴な単純ないいかたをするとね、工場が出来てそこで働いて10年もしたら、だれちゃうだろうと。そこの運転管理に対しては緊張関係が持てるとしてもね、そこに存在することを否定することが10年後に本当に出来るだろうかと。ていうのが非常に大きな問題だと思うのね。一つ間違えば、そこで何人かが働いて生計立ててると、もっとごみをくれ！ってことをおれらが言い出しかねない。10年間われわれが変わらずにいられるのかって大変な議論だった。だから、どっちが正しいかはわからない。ただ、ごみを原料として活性化することは間違ってる、基本的には間違ってるんだけど、でもそれががちがちに島の経済構成の中に組み込まれちゃうと、僕らは逆にごみがないと生きていけない人間になると、そういう危険性を持つてる。その中でそれを抱えて議論をし、10年間耐え続けてこれを排除するってゆうことが本当に出来るかな。だから、島からの雇用ってことも考えたのよ。雇用対象は10年後に定年を迎える人間。それより若いやつはダメ～とかね。いろんなことを議論した末、結局ね、仮に豊島でやるってことになったとしても、われわれはそこで一切働かないってことになったの。で、豊島に作るってことにはならなかったんだけど・・・ま、そんないきさつはありました。あれさえあれば、儲かったのに、食えていけたのにつて言ってる人がいるのは良く知っている。でも、それを少なくとも僕自身に照らし合わせて考えると、これぐらいいいか、これぐらいいいかの繰り返しですると経済的な欲のほうに走っただろうかと、他の人はもっと強いのかもかもしれないけど、僕はそんなに強くないから。ま、いずれにしてもですね、どこにどう作るかって言うのは豊島の住民がどう騒ごうとも、全く答ええないような世界でどうやら決まってるらしい。

2-3. 豊島の活性化と趣味とアンケート

学生D：じゃあ、僕から。住民Iさんのデータの豊島のアンケートのやつを見せてもらったんですけど、僕らもいろんな方々の話を聞いてきて、いろんな方が「活性化」っていう言葉を皆さんおっしゃるんですけど、豊島の人たちはみんな豊島を良くしたいって思ってることには変わりないんだけど、それを思ってるだけの人か実際に動いてる人かっていうのが問題で、実際活性化をしようと言うと、アンケートにもあったように、60代の方々はあんま人間もおらんしてなって、20代の方々は活性化しようって言うても具体的な案が浮かんでこないってあったんですけど、住民Iさんは「活性化」ってどんな風にお考えですか？

住民I：(笑) 活性化をどんな風って言われてもちょっと抽象化しすぎててわからないんだけど、活性化とはなんぞやって言う話なのか、どういう風に活性化するのかっていう方法論の問題か、どっちのほうなの？

学生D：ほとんどの人が活性化をしゃべるときには経済的なことをいってると思うんですよ。で、住民Kさんは経済的な活性化よりも心の活性化だっておっしゃったんです。で、この前一人、豊島は福祉の島だって言った人がいて、僕はその人が言った「福祉の島」って言うのがすごく印象的で、あとの方は経済的な活性化を言ってらっしゃった。で、にもかかわらず60代の方は人数がおらんから、若い方はデータを見る限りでは何をしてるのか良くわからない。豊島がどっちを向いているのかわからない。そういういことで経済的な活性化ってあるのかなって思ってしまいうんですけど、もう活性化なんてしなくてもいいんじゃないかっていう声もあって、福祉の島で生きて言ったらいいじゃないかなとか、もうこれから日本も経済成長じゃないのに、何でそんなお金お金っていうんやって人もいて。で、住民Iさんはどうお考えになってるのか

なっているのが聞きたくなくて。

住民I：そうねえ。きみは趣味は何？

学生D：趣味ですか？！

住民I：(笑) いや、どう切り替えそうか考えて。(笑)

学生D：趣味ですか・・・ずっと野球やってたんで。

住民I：すごく健全だな。僕は不健全でね。物欲がいっぱいあって、衝動買いとか良くするし。あの、なんだろうな。何年もこれが欲しいとか思って、一生懸命バイトしたりしてさ、買ってこれ宝物だって思えるもの持ってる？

学生D：持ってないです。

住民I：それはいいかもしれないな。みんなはどうですか？こだわって買っちゃいましたっていうブランド物のバックとか持ってないだろうな？持ってるからって怒りはしないんだけど。(笑) ものってすごい不思議でねえ、これ買うぞって思って欲しいって思ってるときはすごい執着できていいんだけど、本当に手に入れてしまうとね、次が欲しくなる。満たされない。お金ってのも同じ性質を持ってるって思うんだけど、まあ、逆に言うとお金で物事を評価するようになってから随分おかしくなってるなってね。(中略)で、ものっていうのはどうも満たしてくれそうにない。で、経済っていうのもね、やっぱり大事なんだけど、どうも触りにくいのが、お金儲けが全てになっちゃうとこんなぎすぎすしたいやらしい世の中ないだろうって、ねえ。ま、なんとか必要なお金ってのは確保されて、困りはしないよっていう状態は必須条件としているんだろうけどね、だけど、そこからプラスアルファはね、どうでもいい世界なんじゃないかな。それより大事なものって言うのはやっぱり、あの、本当にねその人が納得して生きていけるかっていうことのほうが大事なんじゃないかなって気がするね。で、そうするとね、活性というのは何ぞや？なんやろ？っていうことになってくると思うのね。で、だんだんそれやってくると、抽象的になってくるからいけないんだけど、でもね、基本的には人が主体的に生きて、それで、且つその人の存在が肯定されている状況というのが、ねえ、「おれはこんなに苦勞してるんや」って言いながら目をらんらんと輝かせて生きてきた人いっぱいいるでしょ？そうかと思ったら、大金持ちのくせに死んだような目をしてね、「おれはこんなに不幸だ」って嘆いてるやつもいっぱいいる。じゃ、何が人の幸せなのかな？やっぱり、圧倒的にね、欠乏しているって言う状態はやっぱり苦しいんだと思う。そこは回避するという意味での経済は絶対いると思う。思うけれども、どうしても経済を目標に置くことは出来ないなって思う。で、それよかね、若干不足しているのを満たそうとしてる時の人間っていうのはすごく明るく生き生きしてるって思うんだけど。まあ、抽象的に整理するとね、活性化するって言う、活性化している状態って言うのはまず、結論から言うと、こういう状態って言うね、完成像はないんだと思う。まず、仮定だと思う。そこを明確に見据えてね、そのためにおれたちは貢献してるんだぜって言う主観の中で、それが客観的にも評価されてるっていうバランスが取れてる状態って言うのが一番社会として健全だと思う。で、ただ、実際に何をやるのかって言うのを、それを言うとね、やっぱり具体的な目標を定めて、それが且つエゴに繋がらないものじゃないといけなくなって。で、過去形でいうとね、豊島の住民運動って言うのはまさにこれほど活性化している状態って言うのはなかなかないんだと思う。これも、賛否両論いろいろあるんだけど(中略)お医者さんたちがすごくて島の住民運動驚いて、なんでこの島のじいちゃんやばあちゃん達はこんなに元気なんだ？って。彼らが・・・象徴的なのは住民Nさんの言葉なんだけどね。「このまんまじゃ、死んでも死にきれん。子孫に申し訳が立たん。」で、僕が事務局やってたらね、やってくるのよ。「住民Iさん。聞いておくれ。」「なに？」って言う

たら、「ええかあ？」って。「なにが？」って聞いたら、「わしはもういても立ってもおれんのか、県庁行って知事をブスッとやりたいんやけどええか？」って。「お前がええって言うてくれたらわしは行くんじゃ！」って。(笑)「もう、刑務所でもいいからいくんじゃ！！」って言うわけよ。そうって泣き出すんだけど、でもそれは結局ねえ。・・・実は日本という国はちゃんと合法的に人を殺せる国だから、死刑が存在するしね。これが死刑に値するのだからってことを客観的に証明すれば、ものずごい膨大なエネルギーを要するけれども、人を死に至らしめることは出来る国なんです。で、いわゆる暴力だとかテロだとかが恐ろしいのは、法律上それは認められはするんだけど、それをするための手続きを一切せずにやっちゃうところが恐ろしいんだよね。で、これももちろん法律についての話だけども。で、じゃあ彼は不幸かって、彼は直接的にはできないだろうね。だけど、それは正當に社会的に葬りましょうって。制裁を受けるべき人間にはその制裁を受けてもらわんと困るよね。で、そういう中でね、じゃあ合法の中で私達はいったいなにが出来るのか？こういうことをやりましょうよって言ったら、「そうか。そういう方法があったか！」って言ってニコニコしながら出かけていくの。でも、彼は自分の何らかの欲望が満たされるために行動しているわけじゃない。自分がこの世の中に存在したことが証明され、且つそれが子孫に肯定される存在でありたい、唯一願望って言えばその部分だね。で、それが、そのためにほとんど無制限って言える行動をしていくし、且つ「お金ないやろ？」ってなったら住民会議に10万とか20万とか寄付してくれるし。で、もう私財も投げ売り、自分の時間の全てをなげうってね。で、彼が不幸かって言うと、僕は彼は幸せな人だと思う。だから、そのお金で評価しにくいけど、島を良くしたいって言う気持ち、具体的な目標が見つかって、でそれに向かって進んでって、間違っていると気が付いたらまた修正すればいいわけであって、そういうことが持続的にやれていて、少なくとも激貧じゃないよ、横這いに維持できてるっていう状態なら地域として十分活性してるって。抽象的でごめん。で、お金の問題はね島の方に説明してもらって。(笑)

学生D：実際インタビューする前に、豊島問題、ていうか60代くらいの方は絶対インタビューして、豊島を良くしようっていうやる気のある人たちかなって思ったんですけど。

住民I：普通のじっちゃんやばっちゃんだな。

学生D：で、実際にインタビューしてみると、40代の人たちに言わしたら60代の人たちは動かない。

住民I：60代に言わせた若いやつは自分のことばかり考えてって。(笑)

学生D：で、この前は年金をもらってる方にインタビューできて、もう、ええんかなって。しなくてもええんかなって。年金もらってるから、みたいなことをおっしゃってて、なんかこう、無力感っていったら違うかもしれないけど、

住民I：そこはね、幸か不幸かなの。その部分は。あんたが何とかすべきだ、いやあんたらが何とかすべきだって、人に依存していることだね。で、自分には何が出来るだろうって主体に変わったときにね、人間っていうのは客観的にも肯定される存在になるんだと思う。で、少なくとも豊島の30年の住民運動の中ではほとんどがそういうことなんだっていう体験があったはず、で、そのことをわれわれ豊島の住民自身も、普遍的なこととして捉えることが出来るかどうかというのが今問われてる。・・・だと思うんです。

学生D：じゃあ、今は活性化してない状態なんですか？

住民I：そんなことはないと思うよ。相対的に見るとっていうか、他の日本中の地域社会と比べたら、それでも豊島は活力のある島だと思うよ。ただ、運動のピーク時点と比べたら今はかなり停滞してるっていうことに。その、豊島っていうのは一つの国であってね、今、イラクがどうだこうだって言うてるでしょ？大量破壊兵器がある、大量殺人兵器があるって言って、攻撃す

るのはアメリカって言うのは、大統領って言うのはものすごい求心力を持ってる。ものすごく簡単に「あいつらは悪い。」って言ったらそれを攻撃するものすごいコンセンサスを持ってる。それは冷戦構造の中でずっとあったわけだね。それをするには仮想脅威を持ってね、「やつらの脅威にどう耐えうるんだ？」っていう、半分狂気、それと憎しみの対象を持つことによって、国民の心を一つにして行こうって言う一つの構造。冷戦構造っていうのはまさにそういう構造だから。で、日本の北朝鮮問題っていうのももちろんそういう問題だし、それから、イラクの問題っていうのもそういう性質を持ってるわけね。で、そういう言い方をすると、香川県って言う仮想敵国が存在したの。ま、現実にも敵かもしれないけど。その敵が存在した豊島って言うのは非常に人心を集めて、一つにベクトルを向けていくっていうのはやりやすい現場だったわけよ。ところが、調停成立って言うのはこれから共同して一つの目的を達成していく、それはあのごみに勝つことである、これは作業としてやれることなの。もう一つ厄介なのが、豊島の運動って言うのが何かっていうと、豊かな島を子々孫々に伝えていきたい、じゃあそれは何なんだ？目に見えやすい脅威と違って、自分達が参加してそこに豊かさってものを模索し、それを維持継承していくっていう、十分抽象的なこと。時間的な制約っていうのも見えないし。その中でね、どう人間が主体的に取り組んでいくかっていう、ごみを撤去することよりも比喩物にならないくらい難しい。それが今の豊島が置かれてる状況。そういう客観的な状況を考えたら、やっぱり相対的に豊島は優秀だと思う。いろんなこといってるけれども、それでも島を何とかしようぜってなったらワーストと人が集まってくる。その力はほとんどの日本の地域が失った力を豊島はまだ温存してると思うけどね。抽象的な回答でした。その秘密が解き明かせたら藤本君は大学の教授になるかもしれない。(笑)

学生D：インタビューしててその60歳代の無力感って言うかそういうのがずーっと気になってて。

住民I：ああ。そうかなあ？

学生D：どこの島に行ってももちろんそうかもしれないし、高齢者の方々が若い人の・

住民I：東京行って同世代の人を取材してごらん。ほとんど家に引きこもってね、することがなくて自分の存在が見出せなくて、安心して暮らしてる人が圧倒的に多いと思うよ。高松の老人はなにしてるんだろう？東京の老人のほうが厳しいと思うよ。

学生D：豊島の方々は10分の4が60代じゃないですか。で、島を動かすとしたら他の土地よりも平均年齢が高い。60代がキーポイントになると他の方々もおっしゃってて。じゃ、産廃問題に携わった方が、それでも豊島を動かそうって、こう下がってるっていうか、そんなもんなんているのかって。他と一緒にって。

住民I：一緒ではないでしょ。

学生D：もちろん、それは高いかもしれないんですけども。

住民I：ちゃんとまだ、こうだよっていう答えは見つけられてないけど。ごく一部の地域社会を残してほとんどの地域で過疎化が進んでるでしょ、ねえ？じゃ、どっか、明確な処方箋を立てられたところがあるかっていう話だね。・・・あの、生かされて生きててもつままないよね。しんどいけど、自分で立って生きていくって言うのがいいんじゃないかなって思うよね。で、そうゆうスタンスで生きてるスタンスの人っていうのは、年齢性別関係なくかっこいいよね。そういう人たちっていうのは経済状況なんてあんまこだわってないのよ、ほんとは。生活に困ってたら別だけど、そうじゃない限りはね。でも、地域が元気だとか、人が幸せだとかはそういう世界にしか存在しないんじゃないかな？あの人はあれを持ってるから幸せかっていうと本人は不幸かもしれないって。永遠にわかんないかもね。

学生D：なんだか抽象的な話ばかりで・・・えーでも、これがあれなんかなって。なんかもう産

廃問題は終わったって人がいて、でも60歳代の人って実際に産廃問題で闘った人たちも多くって、まだ終わってない終わってないっていうのかなって思ったんですけど、それでも年金をもらってる方々はもういいじゃないかっていう人がいて。これがこんなに多いかなあって僕の中ではあるんですよ。

住民I：いや、だから、ある程度ほうったわけで、みなさんどうですかっていう。あのアンケートって言うのはね、客観的に知りたいっていうか、終わったって人が多いんだったら、それはね、違うよ！っていうキャンペーンをやらないといけないって思って、で意識調査をやったわけで。あれはアンケート結果に従いますっていうんじゃないで、あれを見てこれからやるべきことを判断する材料にしたいっていう、どっちかっていうとそっちが中心。って言うのは、アンケートをとるっていうのは何かにつけ危険な行為なんですよ。知るためにはいいんだけど、要はね、人間って言うのは基本的に弱い存在で、楽なほうへ楽なほうへって傾いていくの。で、うまくいえないけどね、集団とか社会って言うのはさ、閾値みたいなのがあって、このラインを少しでも超えてると非常にどんどんどんどん前向きに動くのね、ところが、少しでもそのラインを割っちゃうとね、今度はマイナス思考でどんどんどんどん下り落ちていくのね。今、どこにあるかを見たい、そういうことであってそれによってはよっぽどね、根本的な処方箋を考えなきゃいけないっていうね、でアンケートをとるときに、いや、実施する前に話し合ったの。話し合っただけでなにしたかって言うと、アンケートの結果はどうするのか。何のためのアンケートかって言うのを確認しようぜって。アンケートをとって住民の意向が産廃を終わったっていうものなら、そういうことならそれに従うってことなのか、それともそうだったら、そうじゃないでしょと、本当にそうなのか考えましようって、打って出るためにするのか、どっちなのかって言うのを先に決めよう、結果をとる前に。そういう話し合いをしたの。で、アンケートの結果に従いますっていう手法をとるわけではないって言うのが前提だったの。割とよく出来てたでしょ？あれ、人間コンピュータで作ったのよ。

学生D：？：どうゆうことですか？？

住民I：(笑) どうやって集計するかでね、なかなか誰も考えてくれなくて、で、あれも聞こうこれも機構って言い出してね、単純のいえば、4択が20問あって1000人に回答をもらえたとしたら、いったいそれは素材としていくつになるのっていうね、誰がそれをデータベース化するのよ。それは専従を雇っててよ、2ヶ月やるからそれをデータベース化してよって言うんだっらいいよ。いないんだから、そういう人間。で、コンピューター処理で最近では簡単に出来るんだってみんな先入観で思ってるわけよ。誰が入力するんだ？って、そういう話でしょ。で、それがいないっていう前提でやらんといかんかったから、それで結局なにをやったかっていうと、人海戦術。まず、最初に全部属性分類やるの。で、地域を分ける、世代を分ける、性別を分ける、なら、まあ1グループは10人とか15人になる。それをみんな正の字で回答を書き込めって。そのグループ化を人海戦術でやって、Hさんと2人で一日で入力したの。で、もうそれ以上やらんで、おれらは。これを誰か一人が入力するって言ったらなかなかって、そういう状態になっちゃうじゃないか、だから僕がおもしろいだろうって思うのは、普通コンサルなんか丸投げしちゃうと、どうやって集計するんやって言うことなんか議論しないだろうし、そうやって回答を地域別、性別別、世代別でね、傾向分析をかけられるかっていうような最低限のデータベースでありながら、われわれの手に負える処理の方法はなんなんだっていう。それとこのアンケートをどう使うかっていう、その目的を明確にするって言うこと、それをやってからやったんだから、地域住民がやったにしては結構レベル高いやろって。(笑)なんかその、誰かがやってくれる、例えば行政がやってくれる、そういう風な期待を持ってる人いっぱいいる。

期待って言うか、慣らされてて自分が今の時代の主体だと、で、ごみの問題でも一緒でしょ？目の前からなくなったら自分の問題じゃなくなったじゃないのよ。あの、逆にいけばいろんな制度とかルールとかがあったりとかいろんな人たちがそれぞれの職場で部署でいろんなことに対応してくれてるわけじゃない。でも、決して彼らが一人一人のことを思って、どんなことが起こっても、絶対あなたを助けてあげますよっていうスタンスで仕事してるかって言うと、それはないのね。本当の原則って言うのは自分のことは自分で守るっていう、それが厳しい部分ではお互いがお互いを支えあう、それを模索していこうってしかない。今の農協の不正表示の問題にしたって、それから、どっかで誰かが使い込みをやったって、で、みんなが本当に誠実にやってたらあんな事件なんか起こるはずない。そうじゃなくて、おれさえ良ければいいっていうやつらがいるから、ああゆうことが起こるわけだよ。で、しかもおおきな機関になればなるほど、巧みにそれを利用して自分の利益につなげようとするやつらが出てくるわけだよ。自分のみは自分で守るしかないっていう、それが大原則でその上でお互いを助け合ったりする必要がある。それが至るところで腐ってるわけだから、若い人たちはどうするんでしょうね。私は、私の世代なりにやりますから、もう20年前には返れない。10年前にも返れない。(笑)

2-4. 50万トンの産業廃棄物(?)からの問題提起

学生D：産廃って60万トンなんですか？

住民I：どういう意味？

学生D：産廃って60万トンなんですか？

住民I：あそこの産廃？〇〇の調査では50万トン。

学生D：50万トン・・・それ以上あるんですか？

住民I：何が聞きたいわけ？

学生D：産廃、この前聞いたんですけど、もっと横掘ってみい、なんぼでも出てくるわい、って言う方があって・・・。そんなもん豊島の住民はみんなしっとるわい、言わんだけや、って言うってたんですけど、それは言い過ぎなんですか？そんなことはないんですか？

住民I：どこの地域の人？

学生D：え～・・・K地域。

住民I：そのK地域の人が言ってるのは、豊島事件の産廃の話だろう。ここの話なのか・・・違うんじゃないの？

学生D：今の地域以外の所の話をしてる？

住民I：うん。だと思っよ。あとプラス40万トンぐらいある。

学生D：豊島にですか？そこはもう処理される予定はない・・・？

住民I：ない。

学生D：それは豊島の方々みんな知ってる？

住民I：知ってる。

学生D：今分かってる50万トンだけが処理される目安。さっき処理される目安が分からないって言うってた

住民I：目安も何も、50万トンが処理の対象。40万トンは合法処分場。不法投棄じゃない。

学生D：そのことに関しては、みんな知ってるけどみんな仕方ないかなって感じなんですか・・・。僕は豊島に住んでないですから、ものすごく客観的に見て、失礼なことを言うかもしれないんですけど。

住民I：いや、どうぞどうぞ。

学生D：でも、産廃問題をしたからには、産廃問題を課題にしたからには、徹底的にやるんかなくて思ったんですけど

住民I：どうやって？

学生D：それは僕は分からない・・・

住民I：そうやね、だから・・・あのね、仕方がないってことかって言うところある意味そうやろう。・・・うん、生きている限り、僕は向き合います。まあでも子孫にも向き合ってもらわなしょうがない。しょうがないね。豊島は15平方キロの島の中にね、まあいわば都会からの不要物が三箇所来てる。いわゆる豊島事件50万トン。もう一箇所はね、40万トン来てるかな37、8万トンだと思うけど、これは管理型最終処分場として来てる。でもこれは総量としては知れてるけど、それでもカドミウムと鉛が、水濁法の排水基準値ギリギリか超えてるレベルで少しずつ瀬戸内海に流れ出してる。

学生D：それはどこの地域？

住民I：K地域だよ。

学生D：K地域。・・・あと一箇所は？

住民I：あと一箇所はね、これは厄介なものが入ってるかどうか分からないけど、これももうひとつK地域にね。あるA山ってところがあって、そこは建設岩600万トンあって。600万トン・・・330万リューベい×しじゅう1.7。500万トン・・・560・・・500・・・600・・・それがどうした？

学生D：それがどうしたってんでもないですけど。

住民I：それがどうしたって・・・いろんな地域を見て回ると、そういう話聞いたら豊島って酷いところだと思う？

学生D：いや思わない。それをこう例えば60万トンと50万トンって公表してるじゃないですか、それがあるから動けないのかな～と思った

住民I：そんなことはないけどね。高松市民よりはよっぽど健全な暮らしをしてるつもり（笑）それは知ってるか知らないか、公表されてるかどうか。豊島の人知ってるよ、それはね。で、これはぶち破るしかないかな～と。同列ではやれない。法律の壁があるから。合法だから。豊島事件ってのは違法だし、県が法律違反に加担したから、県の責任を追及して税金で浄化するようにした。で、もう一箇所はね、これは有害物が漏れ出してる。わずかずつではあるが。だけれども、これについては法律上は手を出せないし、責任を追及する対象はいない。合法処分場ってのはすべての関係者が法的責任を果たしてるから。

学生C：その今の産廃地域で対象になってるとこ以外のやつも一緒に来たやつなんですか？

住民I：時代としてはおんなじような時代。

学生C：でも別の、別から・・・

（中略）

住民I：ゴミ問題の深刻さなんて・・・豊島事件がどうなんてのは、豊島事件で見るべきことは二つあってね。1つは再起の不可ってのは実際どういう風に処理されてきたかってこと。めちゃくちゃやってる。みんなが生きてる社会システムがそこに対する責任を持たずにやってきたんだよ、ってのがひとつ。もう1つはね、その・・・まあ自分で責任を持ちなさいよってということではあるんだけど。その自分達の地域を、日本中のちっちゃな地域社会が僕たちの地域は自分たちで守る、っていう姿勢になったらそれは・・・許されてるはずないし、結局国民の無関心がそれを容認してる。で、その国にあってどう主体的に動いて、問題解決に臨んでいく。少なくとも、曲がりなりにも豊島は立ち上がって、ひとつの道筋を見せて。こっから先、豊島住民

が同じように新しいこと切り開いていくかは未知数だけでも、でも、その在り方がどういうことなのかっていうことは、これは絶対考え直した方がいい。で、豊島がどうだこうだじゃなくて、あんたは自分の地域でどう生きてるんですか？ってそういう話が問われてくる。そういう問題提起。

学生D：なんかこの前、人物相関図とか書いてこうじゃないとかか話してたんです、って言ったらそんなんしても、こういう心理見つけてこんでも。提案したい、提案やできるわけないやろって言われて。できるわけない、お前らは聞くだけで十分やって言われて。なんか聞いていったら聞いていくほど、どこへ行ったらいいやら・・・って感じなんです。

住民I：どつぼに入るんよなあ。

2-5. 島の活気と行政

学生E：産業。産業が育たなくて衰退していくっていうか・・・活気付くこともなく終わってしまう・・・

住民I：ここの問題は活気って何だろう。人口って圧倒的に減っていくわけやし、止まらないよ。過疎・高齢化・少子化ってよく言うけど・・・人口は減るっていうこと自体はね、あんまり問題ないんですよ。問題なのはね、こういう人口の列挙になってこういう状態になって、そのマスが減った時にまたこうに近い状態になる。この過渡期をどうするか、っていう問題が大きな課題。まあ確かに社会機能として地域社会の機能として、最低限どんだけいけば維持できるのか？って問題は出てくるかもしれない。その辺はいんじゃないかなあ。いんじゃないのっていうか・・・産業ってというのが育つ可能性は十分あると思うよ。土地があるし海があるし、ね。素材とか資源という意味では、人口密度のわりにすごいねえ。全国でも非常に優秀な部類に入るんじゃないかな。要は今までみたいな単純なね、みかん作ったら儲かるとか、そういう発想での産業というのはちょっと成り立ちにくいなあ。社会の仕組み上ね。それと今まではわりと短絡的に取って売りたいな発想が強かった。まあこれから大事なのは、持続可能な再生産ができるどうかってこと。その意味では土があるって非常に強いよね。少なくとも豊島という島自体は、1000人や1500人なら軽く自給して養う力はあるから。例えば米を作ってそれが売れるかっていうと、単に今の豊島みたいなちっちゃな区画の棚田で米を作って、労働生産性が一般的な会社員と比較した場合にちゃんと成り立つような数字が出るのかっていうと、それは出ない。要はね、うーん、難しい質問やけどなあ。例えば、農業を産業だと考えた場合に、農業の三要素っていうのは資本と土地と労働力。これをね一自己完結するって言うのが今までの考え方で。けども、果たしてそうなんだろうか。例えば土地っていう要素について考えてみると、法律上は確かに個人の所有権が認められてるけれども、所有権を主張するならほんと死ぬ時包んで持って行けって言いたいんだけど、誰も持ってったやつはいないから、だからあれはかなり公共性がある。そうするとね、個人の法律上の所有権てのを認めながら、この資本がいかに円滑に流動していくか。戦後の農地解放の・・・非常に頑固けども、そういうことの工夫ができれば新しい領の主体の形態ってのが考えられる。個人が自己完結の中でやって、既存の概念の中で作物を生産していくと、労働あたりのまともな人件費が出てきませんよってのが、農業は食えないって言われる。そうするとそこの構成要素を変えていくしかないでしょ。そこには無限の組み合わせ方があるわけだから。これで農業が成り立っていく可能性はある。

学生C：豊島には必要ですか？

住民I：必要です。はい。

学生D：具体的には農水産業しかないと思うんですよ

住民I：あのね、未だにね持続可能な産業って言い方をすると、一次産業しかないんですよ。それ以外のものは浪費型ってのを免れてなくて、再生産、持続可能な産業っていうのは農業以外には現存しない。将来はわかんないよ。でも少なくとも今はそう。

学生D：この前カタカナで習ったんですよ

住民I：何ていうカタカナ？カタカナ語？

学生D：持続可能な・・・

住民I：サステナビリティ。サステイナブル。質問の答えになってます？

学生E：豊島はこれからどうなっていくと思われませんか？

住民I：どうなっていくか知らないけど、問題はどのようにしていくかだと思う。

学生E：こうあってほしいっていう豊島の姿とかありますか？

住民I：秘密（笑）あの一、全然たぶん違うこと考えてるかもしれないんだけど、地方公共団体はもう限界に達してるって思っていて、乱暴な喋り方をしますが、その何でダメになっていってかと言うと、僕あんまり知らないけど、明治維新以降の変化っていうのを考えたら、昔は地方主権でしょ。まあ幕府が参勤交代で浪費させてね、土地を衰退させてその力を奪おうとした部分はあるけれど、でも藩っていうのは一国の国で。昔はお国自慢で殺し合いをしたっていうぐらい、地方に誇りを持ってたわけだけでも。で、文明開化、明治維新と共に中央集権国家、今の国の基本的な方針っていうのを整えてる段階。その時期から、地方自治、地方公共団体っていう概念はおぼろげながら出始めてはいるんだけど、でも中央が統治するっていうそういう考え方の国づくりっていうのが始まって。実はそれまでにね、自治ってのはそれなりにあった。よくも悪くも。幕藩体制がいいかって、いいとも思わないし、身分も変えられないなんて大変むごい構図ではあるけども、でもその村の名主がとか悪代官がとか、搾取して、実際搾取してるんだけど、搾取してそれを公正に社会還元していれば非常に健全な地域社会だけど、そうじゃなければ殺される。殺されてちゃんと蓄えた資材ってのは再分配される。暴力的ではあるけれども、曲がりになりにも地方の主権って、自治とは言い難いかもしれんけどなあ。でもそういう仕組みがあった。で、明治維新以降、地方公共団体という考え方がでてきたのね。県とか市町の類。最初にやれた事務は何かっていうと、しせき・戸籍・徴兵。以上なんですよ。結局、あんたこんだけ土地持ってるから、税金こんだけ納めなさいっていう、あるいはあんたはどこそこの誰の子であってここに定住している、そういうことやって。で、あと戦争だ戦争だっていうんで、軍隊入れ！って徴兵採用。社会資本整備だとか社会保障とかはやってないんですよ。最初の自治では。そこをどこがやってたかっていうと、昔の村社会、共同体。地方公共団体っていうのはお金持ってなかったからね、昔は。今、公務員の給料が高すぎるってよく非難されるけど、ここ10年、20年の話で、30年、40年前だったら公務員なんてバカらしくてやれない、職人さんの半分から3分の1ぐらいの給料ですよ。だから公務員なんて食えないやつがなるもんだって時代がずっと続いてて、それがだーっと急騰したのは極々近年。みなさんが生まれて以降の話です。で、今になって公務員の給料が高すぎるって。えー、まあ地方公共団体っていうのがあって、そのそれこそ学校を作るとか建てるっていうのをどこがやったかっていうと、自治体なんかやってないんですよ、地域の共同体がやったんですよ。ため池作ったり農道を整備したりそういう社会資本整備もみーんな共同体がやったんですよ。金があるやつ、搾取してる側がそれをなげうって、新しい道路作ったりため池作ったり、そうやって飲み水確保しましょう、農業用水確保しましょうってなことをやってた。社会保障はね村の名主が資材なげうって。それとか烏帽子子・烏帽子親っていう言葉があって、それはねどうということかって

いうと、藤本君に子どもが出来る。で僕は藤本君の子どもと親子の杯を交わす。万が一藤本君が死んじゃったら、しゃーないワシの子やあって言って、自分の子どもに準じて育てる。契約上の親子。逆に例えば、僕の子どもが死んじゃって、烏帽子子がいる藤本君の息子は藤本君の実子であって僕のえぼし子。彼は自分の親である藤本君の老後の面倒を見ると同時に、僕のこととも自分の親に準ずる形で老後の面倒を見なくちゃならない。これがその烏帽子子・烏帽子親の契約上の関係。結局本当の親子関係にどっちかに事故がある場合は、面倒見ます。そういう約束。これはお金かけなくても、生きて中で、お互いの信頼関係に基づいた約束。最も原始的だけど非常に実行性の高い社会保障システム。これつい最近まで豊島にはあった。今はお年寄りのね、あの人はどこそこの烏帽子子やった、って話に出てくるくらい最近まであった。実はね、社会保障や社会資本整備ってのを地方公共団体がやり始めたのは、高度成長期に入ってからで。ここ40年ぐらいにそういう制度になってきた。で、問題は自分の（結婚してるとして）だんな、子ども、その関係の中で起こったトラブルの処置。個人の家庭の問題、これは自分の問題として捉える。で、地方公共団体が公。昔はねその真ん中にもう1つのパブリックがあった。地域社会共同体これは自分の問題だった。自分たちがね、飲料水がないどうする？っても公がなんとかしてくれるなんて有り得ないから、土地を出し合ったり労力を出し合ったりしてため池を作って、水を確保したわけよ。これがもう1つの公・共同体。ところがね、戦後の高度成長期のなかで、この地方公共団体は財源力を持って、この共同体がやってた仕事が全部吸収された。あるいは依存している。何でも公共団体がやりますって体制になったから、個人の公共団体。個人の手には負えないものは全て、公共団体のもの。つまり公のもの。だから役場はなんとかしないとイケない。昔は真ん中にあった、まず問題が起こったら自分らで何とかしようぜっていう、2つの真ん中にあったの。まずは自分たち、それでどうしようもなかったら地方公共団体。今じゃ自分の問題以外、全て公じゃない。今の公共団体と自分達の関係っていったら依存と要求だね。自分が主体として、自分たちで何とかしようというのが全くやらなくなった。これがなあ、財政的にパンクしようとしてるっていう問題。そんなもの、原点に立ち返れば、自分達のごとは自分たちでっていう風だったわけ。それがこの数十年で激変しちゃった。で、しかもバブルは崩壊して税収が上がらない、財源がなくなったから、もうお金ないですよ、どうしましょうか？って合併だのなんだのって議論になる。要は、そこに住んでる人間ひとりひとりが自分の問題、自分の地域社会の問題を自分たちでどうにかしようっていうのがなくなって、ここに依存しちゃうからお金では賄えきれない。だから僕は豊島、豊島に限らず、豊島ってのはねこのなくなったはずの共同体なんですよ。豊島問題に対して豊島は何したかっていうのは、個人じゃなく共同体がやったでしょ。豊島共同体は生きてた。何で生きてたかっていうと、豊島は離島だからだれも助けてくれない。ここがやってあげますよって吸収してくれなかったから、共同体が残ってる。まあ今は旧態然とした体制が残ってたから、そういう慣性も残ってたから緊張する。で、どっかに同じ地域に住んでる人間同士だからって、6年半の調停だったけどその間に会合の数7千回を越えてる。7千回の会合にみなさんのお父さんお母さん出ますか？年間千回の会合に出ますか？出られないでしょう。で1200人ほどの住民で1億6千万負担してるわけ。あんたんとこは5人家族だから50万負担してください。しますか？で、そんな時にね行政の問題だから行政が何とかしろって要求はするけど、自分たちがお金出し合ったり何度も集まったり、これをどうやって論破しよう。やらないでしょう？そういう機能を日本中の地域社会が失ってきた。その分を全部自治体が負ってる。だから主体的に参画するって事の意味を考えてくださいって言うのはそういう意味。それともうひとつはその、逆に自治体・地方公共団体サイドから考えると、財政的にどうしようもない、もたないって状況になって

るっていうのもあるんだけど、僕はねどっちにしたって地方公共団体がもてる機能ってというのは限界点が低いと思う。で、ものすごく多様化してきた現代社会の問題を環境汚染とかね、こういう問題に関して地方公共団体がやれる限度ってのは知れてるから、そうじゃない主体、それはNGOやNPOだったりするけど、そういうものにちゃんと財源が供給できる非課税になって自分の今年に儲かったから、100万を税金で納めるんじゃなく非課税措置をとってNPOに出すように、こういうお金の出し方。新しいセクターが出てこない、やれないだろう。で、もう1つの可能性ってというのは旧来の共同体みたいなものはどういう能力をもてるか。で、僕は豊島はその共同体の在り方としてすごく面白い可能性があると思ってる。今、地方自治法に定義された地方公共団体ではない、本来の自治体、財源も持ち合わせた自治体というのを住民の主体的参加による自治で、確立することができないかと言うことでやってる。交付税って税金から再分配するお金じゃないけども、財源は持つ。執行できる能力と、社会的な責任を負えるという機能を持った、自らの意思による自治体というのが形成できないか。

学生D：国からじゃあ、税金は入らない？

住民I：入らない。

学生D：全く何処にも？お金が交付税から・・・

3. フィールドの発見—まとめとして—

最後に本稿をまとめるにあたって、豊島において藤本がどのような存在であるのかをまず考えてみよう。豊島の住民から見て、一言で言えば藤本はアブノーマルな存在である。それは主に「研究者」「調査者」という認識によるものではない⁴。転入者がごく少なく、高齢化の進んだ豊島においては、「転入者」「若年」であるということが、既にアブノーマルな存在なのであり、常に注目されるべき存在である。

では、藤本はどのような目的で豊島に住んでいると認識されているのだろうか。客観的に定義できる居住目的は2つである。1つは研究上の調査、もう1つは豊島の住民組織である「廃棄物対策豊島住民会議」（以下、住民会議）における事務局勤務である⁵。豊島住民の一般的な認識としては、前者は「学生さん」、後者は「交流センターで働いている人⁶」ということになるため、これに「豊島に居住している」という要素を加えれば、豊島住民からの認識パターンとして最も高位のものは「よそから引っ越してきて、交流センターで働いている学生さん。」ということになる。このパターンは情報の欠損によって様々に変化する。例えば、藤本が住むご近所で、彼が「何をしにきた者か」については知らない住民は少なくないが、彼らの認識パターンは「よそから引っ越してきた、兄ちゃん」ということになる。

一方、藤本には調査者としての主観的な難しさが常に問われ続ける。「どこまで住民になりきるか」ということと同時に、「調査者・研究者としての意識やスタンスを持ち続けることができるか」ということが発生するという、いわば「現場との距離感」の難しさである。

すでに見たように、豊島住民の言葉から「普通の島」という島の姿が見られる。しかしこれは藤本が「雰囲気」をつかんだ程度の話であり、また今現在の話である。藤本が調査対象を広げれば、つかみ取る「雰囲気」が変わる可能性があるし、過去や未来では異なる「雰囲気」が存在する可能性がある。フィールドは不確定な存在である。

このようなフィールドの不確定性について、鳥越と佐藤は次のように述べている。「人間の立場なり考えは、持続的に不動のものではありません。調査の時点でのある人の考えは、多くの選択肢のひとつにすぎません。…中略… 私たちが通常イメージしているような客観性はフィールドでは成立していないのです。」⁷「誰にでも測れるというのは、裏を返してみれば、誰にでも測れる程度

のことでしかないのではないでしょうか」。⁸

フィールドは不明確な情報に満ちている。それは現時点で不明確だけでなく、時間の経過によって変質する。さらに情報としての形態そのものが不明確で観察すること自体が困難である。しかし、その「不明確性」に我々はリアリティを感じている。

それは我々の日常における経験に基づいている。切れ味のいいクリアな論理に、我々はどこか不満を感じている。それは人間の行動や意志に不合理性や偶発性が多分に含まれていることを経験的に知っているからであり、「フィールド」における不明確性は、まさにこの経験知に合致するものである。

一方で、「フィールドワーク」を研究上での手法と位置づける以上、なんらかの結論めいたものを導き出さざるを得ないところに、ジレンマと矛盾がある。例えば、鳥越の「生活環境主義」は「生活者を重視する」という“ゆるやかなイデオロギー”によって、そのジレンマをある程度克服するための方法を提示しているが、このような方法論の提示が「不明確」なフィールドを研究上で生かすことにつながる。

また、豊島に住む藤本と異なり、外部存在である学生も多くの発見をしている。学生と住民一人との対話がいかに豊かに豊島の現実を表わすかは理解されたと思う。対話自体が発見なのである。

現代社会における社会把握は通常大きく二つに別れる。一つはマクロ的把握であり、もう一つはミクロ的把握である。この兩者について最も明確に区別しているのは近代経済学である。経済学ではミクロとマクロの時空間について、一般的な社会学的区分とは異なり、統計指標の集計量分析を問題にするか否かで、マクロ分析とミクロ分析は区別される。教科書的には、マクロ経済学における「マクロ」は、「ミクロ」との対比において、全体的、巨視的あるいは集計的という意味に用いられる。つまり、市場経済における個々の家計や企業というミクロの経済主体の行動の結果をいくつかの代表的な変数に集計して、その集計されたマクロの変数の動態分析を行なうのがマクロ経済学である。そのマクロ変数の代表的なものがGDPや失業率などである。他方でミクロ経済学は、資源配分のメカニズムを分析することが中心である。経済活動には、生産活動、消費活動、貯蓄投資活動、貿易活動などが存在し、市場経済におけるそれらの活動は、労働、資本、エネルギーなどの限られた生産資源を、市場メカニズムを通じて配分している。そのような配分のメカニズムを問題にするミクロ経済学が対象とするのは経済主体の行動である⁹。

このようなミクロとマクロの対比において、それぞれの領域において明らかにされる事柄と住民との交流において明らかにされる豊島の諸相との違いはどこにあるのか。調査や分析以前に認識されている指標を再認識することや種々の変数が機能するメカニズムを検証することと異なり、後者は、新たな指標の発見に重点が置かれるということである。つまり、フィールドサイエンスにおいては、フィールドは所与の事実の集合体ではなく、持続的に発見される対象なのである。それゆえ、フィールドとしての豊島は、産業廃棄物事件に歴史的に色付けられてきた点において、他者を圧倒する決定的な学びの場であり続ける。

注)

1. 詳しくは次の論文を参照。村山 聡、松村雅文、青木昌三、小池和男、渡邊安男「こどもメディア開発—香川県土庄町立豊島小学校との交流開始—」(『香川大学教育実践総合研究』第9号(2004年9月)所収(57-72頁))。
2. 元弁護士の中坊公平氏が先月豊島を訪問した際に彼が語ったのは「自分たちの歴史を自分たちでやりなさい。『10年偉大なり 20年恐るべし 30年歴史をつくる』という言葉がある。豊島には歴史を語れる時間がある。歴史には視点がある。その視点をみんなで考えないといけない。“自立”だ。僕らがやっていることは、

大きな流れに明らかに反すること。歴史が（僕らを）判断する。」ということだった。彼は豊島に「自立」を促し続けてきた。

3. 落合恵美子「100歳女性のライフヒストリー—九州海村の恋と生活—」『京都社会学年報』第12号（2004年12月）、p.17～55、p.24。
4. そのように筆者を認識している豊島住民は多くはない。転入当初においては数人であった。
5. 実際にはこの2つは一体であるが、後者は給与の発生により筆者の生活を支えるという機能がある。筆者は2004年度はこの給与のみで生活していたため、調査と勤務のどちらを主とし従とするかは、客観的な判断は困難なはずである。
6. 住民会議事務局の事務機能が「交流センター」と呼ばれる建物に置かれているため。
7. 鳥越皓之1997『環境社会学の理論と実践』有斐閣p.11
8. 佐藤郁哉1992『フィールドワーク』p.80
9. 村山 聡『近世ヨーロッパ地域史論—経済・社会・文化の史的分析—』（法律文化社、1995年）、p.10-24。

*：本稿は、2002年度から2004年度にかけて支援を受けた、香川大学教育学部研究開発プロジェクト経費による研究プロジェクト「こどもメディア開発」における研究成果の一部である。

(平成17年5月31日受理)